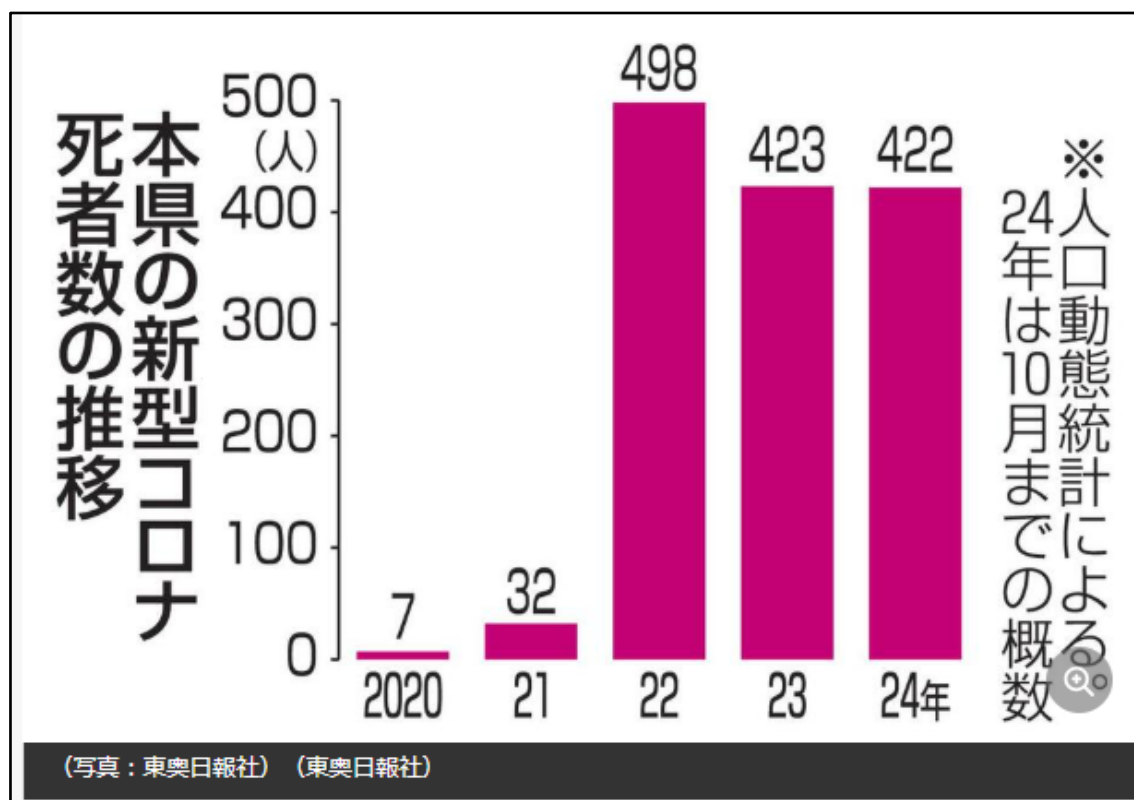


コロナの経験は貴重な財産、継承大切 青森県感染症対策コーディネーター・大西医師に聞く

3/23 東奥日報



新型コロナウイルス感染者が青森県内で初めて確認されてから、23日で丸5年がたった。抗体保有率の調査からみると、青森県の感染者数は昨年3月時点で75万人以上と推計され、人口動態統計による死者数の累計は同10月時点で1300人超。オミクロン株による感染が急拡大した2022年より波は小さいものの、今も夏と冬に流行を繰り返し、状況に応じた柔軟な感染対策が必要となっている。

県内で感染が初めて確認されたのは20年3月23日。八戸市の男女2人だった。感染者の死亡は、同年5月15日に初確認された。21年3～7月ごろの「第4波」はアルファ株、同年夏の「第5波」はデルタ株への置き換わりが進んだ。感染者の9割以上はオミクロン株が主流になった「第6波」以降に集中している。青森県の感染の波は全国とおおむね同時期か、やや遅れて現れている。

当初は全ての感染者数を把握していたが、感染症法上の位置付けが季節性インフルエンザと同じ「5類」に引き下げられた23年5月8日以降は、一部の医療機関の患者数を集計する定点観測に切り替わった。このため単純に比較はできないが、東奥日報独自の概数集計によると、5類移行後も夏と冬に感染の波が繰り返されている。

厚生労働省が昨年3月に実施した献血時の血液調査では、コロナ感染で得られる抗体の青森県の保有率は64.3%。県民のおよそ3人に2人が感染したことがあると考えられ、人口に当てはめると少なくとも約75万人が一度は感染したことになる。

人口動態統計で、確定数（20～23年）と、確定前の概数（24年1～10月）に計上されたコロナ死者数を集計すると、青森県は1382人。このうちの多くは高齢者で、24年もいまだ減少傾向にはない。